
2 番目の魔術師の受難

灯星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2 番目の魔術師の受難

【Nコード】

N9481T

【作者名】

灯星

【あらすじ】

世界で2番目の魔力を持つソウカ。

彼女の不幸は1番魔力を保持する変態で鬼畜な王に目をつけられたことから始まる。

あれよこれよと言ううちに王妃にされてしまったソウカに残された逃げ道はひとつ。それは『異世界トリップ』の術である。トリップしたところからはじまります。

1（前書き）

短編の予定でしたが長くなりそうなので連載にします。
でも、数話で終わらせる予定です。

R15です。ご注意ください。

他の話とはちょっと違う雰囲気です。

「やったあ！わ、私は・・・私はやりとげたぞぉ！」

ソウカは勝利の雄たけびを上げた。

草一本も生えていない荒地。見渡す限り土色の風景が広がっている。

そんな場所にも関わらず、ソウカにはここが最高級のベッドの上のように感じていた。

と、言うより、長い間お世話になってきてたそんなベッドより、この少し生ぐさい匂いとする荒地のほうがソウカにはありがたいものだった。

「これで、これで、あの変態、鬼畜ともお別れができるのよ」

変態？鬼畜？

もし、この叫びを聞いている者がいればそう聞き返してしまうだろう。だが、その場にはソウカ以外生きているものは虫ぐらいだ。

だれか、この解放感を一緒に味わって！

そんな事を考えていたせいだろうか。

だれもいなかったはずなのに、ソウカが地面を見下ろすとソウカの影が3倍の大きさになった。

「あら？お話を聞いてくれるの？大歓迎だわ」

ソウカは後ろを振り返らないまま、小さく手をあげて軽く払う。

「ぎゃあ・・・ぐ・・・ぐ」

呻き声が近くて聞こえ出してからゆっくりと後ろを振り向く。

ソウカの背の二倍以上あるであろうトカゲのような生き物が大きく口を開けたまま固まっていた。なかなか見た目がグロテスクなものだ。

「大丈夫よ。ただの半石化だから。ね、あなた、言葉わかるのかしら？魔物の一種みたいだけど？」

ソウカがそう言うと言をばちさせて反応した。
身体を動かそうとしても動かないからだろう。

「そう。よかったわ。じゃあこの華麗な脱出を聞いて！そしたら見逃してあげるわ」

ソウカはトカゲに自慢話を始めることにした。

あのね。私はここちがう世界から逃げて来たの。

え？どうやって異世界に飛んできたかって？

それは人間死ぬ気でやれば不可能も可能にできるのよ。

それでも私は、その世界で二番目に魔力の高かったの。だからいろいろな新しい術も誕生させることもできたわ。魔術師としてそれなりに名声もあったの。

でもね。一番目が変態鬼畜のあいっだったのが私の不幸の始まり

なの。

会った瞬間、あいつは私を凝視してたの。まるで獲物を見つけた獣みたいに。一瞬でこいつとは関わってはいけないうって悟ったわ。でもね。逃げようとしたときには遅かったの。

あれよ、これよって言ううちに、周りを包囲されて気が付いたら王宮の王妃の部屋に押し込められちゃったの。

あ、あんな変態、鬼畜でもその世界で唯一の王だって言うの。

私なんてただのしがない魔術師なんだから、もっと周りの貴族とかがしっかり陰謀を働いて自分の娘とかを王妃にのしあげていたらこんなことにならなかったのに。

本当に中途半端に野心だけあって行動力がたらないほんぼんばかりなんだから。

まああの無駄にキラキラした美形な顔で一瞥されたら、それだけで心臓をつぶされたような気がするのも頷けるけど。さらに魔王も真っ青な背後に暗黒を背負った邪悪な笑顔をみれば、ちいさな野望も吹き飛んでしまうでしょうけど。

それに、私の部下たちのふがない事。

まるで、命を捧げますって感じで私に付きまとってたくせに、あの変態鬼畜がそばに来た途端に誰もかれもが硬直して、私が誘拐同然で連れ去られるのをただ見送るだけだったし。

で、代々の王妃が使用していたと言われる格調高いベッドに放り投げられ、

『そろそろ諦めてもらいましょうか。ソウカ。貴女は髪一本ですら私のモノです。ええ。たとえ魔術で男に変化しようが、魔物に変化しようが、地の果てに転移しようが、絶対逃がしません。必ず

や追いかけて捕まえて見せましょう』

と、言うやいなや鬼畜にも術で私の身体を縛って……。言いたくないのでそこは割愛。
拳句の果てに、

『ああ。本当にあなたより魔力があつてよかったです。本当はいらないと思つていたんですけどね。こうしてあなたと結ばれるために神が与えてくれたのでしょうか』

などと、世界中の魔術師……。もちろん私も敵に回す戯言をほざく。

女を無理やり自分のモノにするために貴重な魔力を使用するな。それも軟禁のための結界や縛るためだけでなく、媚薬の術、回復の術などほんの一握りの者しか使用できないようなものまで封じ手オインパレードでかけてくる。私は女としてだけでなく、魔術師として殺気を覚えてしまう。

気が付いたら、公表や式まで上げてなくても王妃同然に周りに扱われていたのよ。

でも、ここで！

「一発逆転したのよ。おほほほ」

ソウカが楽しくなって大きな声を出して笑うと、硬直していたはずのトカゲもどきの額からあふれんばかりの汗が出てきていた。

「あら？ここからがおもしろいのよ。汗は吹き飛ばしてあげるわ」
手をぱちんつと動かすと爽やかな風が吹く。その風がトカゲもどきから汗をふき飛ばし話を続けた。

でね。王妃としてお披露目をされる前に私はある術を完成させたの。

あの変態に毎晩虐げられる身体に鞭を打って、王宮から禁書を盗み出して読み漁って脱出方法を見つけたの。

それが、異世界トリップ。

これならどの世界に跳んだかわからないだろうし、王である以上追ってはこれまい。

王の幼馴染みである世界で三番目に魔力のある公爵にはワイロを送って力を貸してもらったっけ？

日々鬼畜に精力を奪われていたので、部屋の結界を壊して異世界に跳ぶにはちよつと魔力が足らなかったから。

わざわざ王妃お披露目の前日を選んで、術を駆使してここに跳んで来たってわけ。

え？なんで前日かって？

今までの仕打ちへのささやかな意趣返しよ。

「最後は正義が勝つのよ！ねえ？そう思わない？トカゲさん」

嬉しくなつてトカゲもどきの顔を撫でる。

硬直したまま眼をこっちに向けている。もし、他の者がみれば瞬

く間に逃げ出そうとするほどグロテスクなトカゲもどきだが、ソウカにはだれも見惚れてしまうであろう美の象徴のような元夫よりかわいく感じてしまう。

「さうって。話も聞いてもらったし、約束通り解放してあげる。でも、これからはきちんと相手を見極めてから攻撃しなさいね。そうしないとすぐに丸焼きにされちゃうわよ」

ソウカはそう言ってすこし大きめに手を払う。

その途端に、目の前の巨大なトカゲもどきはソウカを振り返ることなくほぼ一瞬で姿を消してしまった。

この忠告。

結局トカゲもどきには意味のないことになるのだが、ソウカはそれをすることもなかった。

まあ知ってもどうしようもないんだけどね。

「さうて。村でもさうがそつと」

手を軽くかざすと右斜め横から人の気配を感知する。
そちらに方向に手を向ける。

すると、頭の中に無数の風景と人の話声が飛び込んできた。
さすがに知らない言葉なんだ。

ソウカはおもむろにかざした手の中指を一振る。

途端に聞こえていた雑音が意味のあるものに変化する。

内容はだれそれさんの家で子牛が生まれただの、今年は豊作だの、
祭りは天気だの、小さな子供たちの笑い声など。

「ラッキー。私にうつってつけののどかな村じゃん。そうよ、そうよ。
私はこれを求めていたのよ。ビバ異世界トリップ！」

ソウカは何度目になるかわからない雄たけびをあげた。

もし、ここに部下の誰かが1人でもいれば全身で否定していただ
ろう。特に一番被害を被っていたブルーランスが聞いていたら悲痛
な顔でこう叫んでいたはずだ。

『ボスの辞書にのどかや平穏などという言葉は存在しませんよー！
トラブルメーカーって自覚ないのですかー？』

だが、それはIFの場合であって、現実とは異なるのでそんな風に
突っ込む者は存在しなかった。

ふ。気持ちがいい。

変態がない世界ってだけで空気までおいしく感じるわ。あの、ふたりつきりでもってた部屋の空気のまずいこと。彼の体臭からソウカだけに効く毒が発せられているのではと勘繰ってしまう。

ソウカはつきつき気分のままその場を後にした。そして軽い足運びで村まで飛ぶ。

風の術を使用したので、走る何倍もの速度で到着する事ができた。

この世界に来て二週間。ソウカは小さな村の宿で占い師兼、吟遊詩人、たまに給仕という感じで住み込みで働かせてもらっていた。魔術を使うことも考えたけど、ここの魔術環境がよくわからないのでしばらくは様子見という形にした。せっかく見つけた村で魔術を使用して追い出されるわけにもいかないからだ。

最初にみた通り、100人いるかないかというぐらいの辺境の村で、食糧はほぼ自給自足ののかな村。ただ、大きな街と街の間に挟まれているので人通りは多いようだ。

初めてあった宿の女主人にお金がないと伝える。すると大きな腹を叩き豪快に笑いながら、

「あんた、素直だね。気にいったよ。その無謀なところが。じゃあこうしよう。ここの従業員の小部屋が一つ空いているからそこに寝泊まりして、忙しい時だけ給仕してちょうだいな。占いができるん

だろ？それなら客足が少ない時に食堂の一角で占いしてもいいからさ』

そう言ってくれたのでその言葉に甘えることにした。
女主人の優しさが嬉しかったので、お礼もこめて歌を披露するとびつくりしたように目を丸くする。

『あなた、吟遊詩人だったのかい？聞いたことない歌だったけど、時たまくる吟遊詩人たちよりよっぽど上手いじゃあないか』

その言葉にのせられて、結局食堂でたびたび歌を披露する羽目になった。

客足が大きく伸び、ほぼ毎日満室状態になると上機嫌な女主人が奮発してお古の服をソウ力用に直してくれた。

『あたしの昔の一張羅を手直したんだ。大事に使っておくれ』

これと比べ物にならないほど豪華なドレスを毎日強制的に着せられていた。しかしその何倍、何十倍もこの贈り物のほうがソウ力の気持ちを震わせた。

さっそく与えられた部屋で着替えて鏡で姿をみる。

淡い色のレースのついたすこしシックなドレスである。すそは長いが両肩がむき出しになる形をしていた。

本当に大好きな形だわ。ちょっと露出が多いのはたまにキズだけだ。

初めて着る形なのでへんに外気を感じてしまう。

昔は独占欲の塊の元夫のせいで、こんな形のドレスを用意しても

らえなかったからだ。

まあ、これで宿も儲かるならいいけど。でも、やつが知ったら激怒するだろうな。

思わず、二度と会いたくない奴を思い出してしまい頭を盛大に振る。

ああ。いけない、いけない。変態を思い出すところだった。思い出してしまうと、このむき出しの二の腕が醜いチキン肌になってしまう。

「ブル、ヤト、ラアチ、ダイジュ・・・」

冷静になる呪文として部下の名前を、誰も聞き取れないほどの小さく呟いていく。

その時だった。

「ああ。やはり抹殺するべきでしたね。貴女の可愛らしい口からこぼれるのが他の男の名前など・・・」

美しい誰もが聞き惚れるような艶のあるテノール。

だが、ソウカには悪魔のささやきにしか聞こえない。

一瞬でむき出しの二の腕がチキン真っ青の肌になる。

ひい・・・。

「それに、その姿。私以外に見た人がいるのですか？そんな瞳は一つ残らずえぐり取ってしましましょう」

ひええ〜。

その物騒極まりない声の主を嫌つというほどわかっている。だが、認めたくないソウカはその方へ振り向くことができない。

「おや、せつかく迎えにきた夫をその口で歓迎してくれないのですか？仕方ないですね。それなら身体で歓迎してもらいましょう」

「ちょ！いきなりそれ?!」

思わず振りむいてしまった。

そこに予想通りの目を思わずつぶつてしまいたいほどキラキラ光っている美形の青年が、色気たつぷりの表情でこちらを楽しそうにのぞいていた。

美しい白金色のストレートの髪。括ることもせず広がっているせいで余計にチカチカ視界に入ってくる。

絶妙なバランスで配置された輪郭に眼、鼻、口などのパーツ。

嫌味なほど長い繰り上がったまつ毛の下は青い宝石のような切れ長の瞳。

加えて平均よりすこし低めの身長であるソウカと違い、男性の平均をはるかに超えるほどの長身。ソウカの胸ぐらいのところまで長つたらしい足がある。

少しゆつたりめの羽織るような服装であるために男性にしては華奢な印象を持ちやすいが、彼が十分に鍛え上げられた肉体を持つことをソウカは嫌というほど分かっていた。というか強制的に自分の身体に教え込まれていた。

けっして女性的ではなく、男性の美を追求したような姿をしていた。

100人の女性が見れば99人ともがその美貌を褒め称え、見惚れることだろう。ソウカがその100分の1だったのは言うまでもない。

「ソウカも本当に照れ屋ですね。新婚旅行がそんなにしたかったのですか。本当に気がつかなくて申し訳ございません」

「ちっ・・・！」

「ちやうわい、ぼけ！」

思わずそう言いそうになったのに、目の前の鬼畜が気配を感じさせないほど静かにソウカの頬に手を添えてきた。

野兎を追い詰める野獣のような爛々とした輝きが視界一杯に広がる。

そして至近距離で顔を覗き込まれる。

「そうですよね？ 違うっていうならエドも貴女の部下どもも、この村も、そして途中で会ったトカゲも消滅してしましましょうね」

「なにっ！」

「エドって自分の幼馴染みでしょ？」

「それにこの村って、ここで大魔術放出させる気かい！」

「・・・最後のトカゲはいいとして。」

「どうなんです？」

にこりと艶やかに笑いかけられて、ソウカはそうそうに白旗をあげた。

「・・・はい。ソノトオリデス」

「それはよかった。本当、私の妃は欲張りですね。あえてだれもないこんな異世界にトリップするなど。これなら時間軸を自由にいじれそうなので1週間と言わず、1ヶ月でも2ヶ月でもここで二人っきりで甘い蜜月を過ごせますね」

い・・・いやだあゝ！

それになに？時間軸を自由にいじれそう？

ソウカにしたら死ぬ気で研究してこの異世界トリップの術を取得したのに、それを超える術をあつさりと組み出したっての？

メラメラと魔術師としての嫉妬心が沸き起こってくる。

「・・・滅」

ほとんど無意識に、巨大モンスターですら即死を与えることができる術を口にしていた。

だが、憎き男は空で手をぐるっと回しただけでその術を防いでしまっ

こ・・・こんちくしょゝ！魔王め！

「貴女の愛の試練を乗り越えるのに時間かかったから怒っているのでしょう？本当にこんなに遅くなつてすみません」

はあ？愛の試練？

なんだろう。同じ言葉を話しているはずなのに雑音にしか聞こえない。解読の術をかけたら意味が理解できるのか？

「エドに聞きましたよ。あえて一言もなく先にトリップしたのはソウカからの愛の試練だと」

なんだと！あの劇甘党宰相め！ワイロに渡したエド専用の極甘氷飴作成機、メイド・イン・ソウカを激辛に変えてやる！

そんなことを思っている間に男がソウカの唇に自分のそれを合わせた。すぐに口付けが深くなる。

「う……あっ……」

ソウカは抵抗したいのに、がっちり顔を押さえられているのであるがままになるしかない。

深すぎる口付けを名残惜しそうに、大きな音を立たせながら終了した男は、腰が抜けてがくがくになっているソウカを軽々と抱きあげて部屋の小さなベッドにそつと寝かした。

「ではその試練を乗り越えたご褒美を頂きましょうか」

にこりと魅惑たつぷりな笑顔をこちらに向けている男の言葉に、ソウカははっと我にかえる。

流されている場合ではない！

「こ、ここはだめ！おかみさんや宿のお客に聞こえてしまうっ！」

ソウカは必死に乗り上げてくる男を押しつけようとすが、逆にその手をまるで宝物に触るようにひどく優しく大きな手で包み込む。

「安心してください。私が可愛らしいソウカのあえぎ声を他の男に聞かせると思いますか？防音、空調、開錠の術は完璧ですので、遠慮はいりません。2週間分愛し合いましょう」

いやあゝ。こわれるゝ。

結局、ソウカの一代決心のもと行った秘術『異世界トリップ』に

よる逃亡はこうしてあっけなく幕を閉じた。

どれほどの間、二人が異世界に移住したのかは分からない。ソウカにしても朝とも夜ともわからない日々もすぐす羽目になったので、どれほどの日時が過ぎたのかわからなかった。

ただ、王妃の戴冠式とともに王妃の懐妊もあわせて発表されることとなる。

2（後書き）

とりあえず、ここで話は完結です。

王（そついえば名前かけなかった^^;）視点からも書こうかな？
短い話書くのってちょっと楽しかったです。

3 (前書き)

これからは王であるコーディネオン(っでここで初めて名前を出さ
ってどやねんって突っ込みは勘弁してくださいねw)視点です。変
態ですのでご注意ください。

最初、彼女をみたとき、あれは私の・私だけのモノだと直感でコーディオンは悟った。

いや、正確には彼女の魔力の気を見たときからだ。魔力を有する者は皆、それぞれここに合わせた気を纏うことになる。

幼馴染みで第一公爵当主兼宰相であるエドワールは自分に次いで大きな魔力を持つが、荒々しい性格にあつた真つ赤に燃え上がるような気を纏っていた。

そして自分自身は混じり気のない黒の気。

それに対して、彼女の気は一点の濁りもない純白。

いつからか王宮の脇にある魔術研究所からその気を感じていた。ひどく気になってエドワールにきいたことがある。

だが、ひどく慌てたように、

『きにするな。ただの魔術師だから』

と言うだけで何も答えてくれなかった。

明らかに何かを隠している。それならばと、エドワールの隙をついてわざわざその気の許に行くことにしたのだ。

そこで運命の出会いをしたのだ。

「ボ、ボス！こ、これ以上僕の力に負えません〜！」

1人の少年が必死な声をあげている。

少年などどうでもよかったが、どうやら例の純白の気の持ち主に對してあげている声のようなので、その方を見る。

少年が必死に両手を突き出して結界を張っている。どうやら魔術の特訓中のようなのだ。

「んん？ブル？君のその魔力は限界値まで使うことで少しずつ限界値が上がるタイプなんだよ？大丈夫。私の力程度でつぶれるようなものではないから。な」に、つぶれるようなら私自ら屍はひろってあげるよ」

その声を聞いた瞬間、不本意にもコーディオンの背中になにかが走った。

大きく深呼吸をひとつしたあと、その方を見る。

いままで27年間生きてきて、間違いなく最大ともいえる衝撃を思えた。数年前に前王の突然の死よりも謀反の報せを聞いた時よりも格段にでかい。

薄い膜のような純白の気に包まれた少女。気の色に反して髪も瞳も漆黒のような輝きをしている。

髪は無造作に縛りあげられている。瞳は猫のように大きく釣り上がった形をしている。

ふつくらとしたピンクの唇に口付けしたら、どんな感じにその白い頬を赤く染めてくれるだろうか。

18歳ぐらいだろうか？顔付きは16歳ぐらいだけれども、あの腰のくびれ方、胸の張りは旬の18歳ぐらいが妥当だろう。

コーディオンは彼女があまり身体に密着していない服装にもかかわらず、的確に年齢を割り出す。

「そ、そんなむちゃ言わないで下さいよ。もう限界ですってば！」

コーディネオンの妄想を無視して、より一層必死な声をあげている少年。コーディネオンは彼に対して怒りを覚えた。

彼女の魔力を一身に浴びるなんて、なんと羨ましいことを。拳句の果てに屍まで拾ってくれる？そんな根性無しはその辺の道端に放置しておればよいものを。なんなら私のこの手で……。

当の少年が聞いたなら、

『全力でお譲りします！』

と、言うであろう物騒なことがコーディネオンの頭の中で展開される。

ああ。やはり魔力の気はその人形ひとりなりを現しているんですね。

正直、彼女の容姿など気にかけてなかった。それほど魅力的な魔力の気だった。

しかし、彼女の姿をみた瞬間に身体中の血が沸騰するような錯覚に陥った。

彼女が私の存在を見つけこちらを真っ直ぐに見上げた瞬間、歓喜が足の爪から頭のとっぺんまでかけめくる。

命の強さを感じさせる輝きに瞬く間に囚われた。

もちろん、彼女以上に美しい人もたくさんいるだろう。しかし、この瞬間からコーディネオンには彼女以外、その辺に散らばっている花や置物程度にしか見えなくなってしまった。

「お・・・おちつけ！コード。彼女の存在を知らせなかったのには、深いわけが・・・」

必死に隠そうとしたエドワールを問い詰めると、手をぶるぶる震わせながら言い訳を始めた。しかし、コーディオンは聞くゆとりすらない。

「問答無用です。一週間苦しみなさい」

見ているほうが胸やけをしそうなほど甘党なエドワールは、いつも甘いものを食べていないと気が済まない。

長引く会議でも、休憩になるたびに甘いモノを口に行っているくらいだ。

そんな彼にとって、甘いモノを禁じられるのが何よりのお仕置きになるのだ。

自分でもあきれほどある魔力を使用して、コーディオンしか使できない術をエドワールの為だけに作成したのが、これ。

『味覚変換』

これを掛けるとその間はいくら甘いモノを食べてもすべてが激辛に感じるであろう。

そして、今までにない迅速さで貴族や魔術協会に裏をとって彼女を王妃候補に仕立て上げる。

見たときにわかったが、さすがに王である自分にはかなわないにしても、王族とも血のつながりの深い公爵家の当主であるエドワールを遥かに凌駕する魔力の強さを持っていた。

そのために、血を重んじる貴族どもの言い分を封じ込めることができたのだ。

彼女が強い魔力を持つのも、私と結ばれるがためなんですね。

このとき初めてコーディオンは運命というものを信じ口元の笑みを浮かべた。

その表情をエドワールが見て、

「こ・こえーよ。悪夢を見るからやめてくれ！」

などと、身体を震わせながら懇願してきているのを無視して、彼女とのこれからを色々と妄想・・・考慮していた。

「ボスをどこに連れていくのですか！」

ブルとかよばれていたあの根性無しの少年が、コーディオンの道を塞ぐ。さきほど眠りの術で安らかな眠りについた彼女を抱きあげているコーディオンは思わぬ足止めを食らった。

よく見れば、彼だけでなく数人の男性が同じように立ちふさがっていた。

よほど、殺されたいようですね。

一瞬、毒の術でも放とうかと考えたが、彼女にとっては大切な部下であるとエドに忠告されたのを思い出した。

それでも一度忠告しても駄目なら抹殺しますけどね。

「彼女は私のモノです。異論があるってならかかってきなさい。退きますか？逝きますか？」

そう言いながら、あえてゆっくりと足を進める。

コーディオンの本気を悟った彼らは蒼白な顔をしながら後ずさる。足止めがなくなったコーディオンはふりかえることもなく、軽々と彼女を抱きあげて王妃の間に連れさった。

ああ。これで私たちを邪魔する者はいません。貴女にも私をよく知ってもらいたい。でもそれ以上に私が貴女を知りたい。

そんな、眼に涙をためて見上げないでください。それでも自制しているんですよ。本当に貴女はそんな私の歯止めをすぐにぶち壊してくれる。

おっと、そんなに暴れたら倒れてその美しい肌に傷を付けてしまいます。ああ、縛られたほうがうれしいですね。わかりました。喜んでやりましょう。

初めてなので、痛いでしょう。ですから気持ち良くする術や痛みを消す術も使わせてください。

貴女のために私はこんな強力な魔力を保持していたのですね。

貴女の真っ白い気と私の黒の気が混じり合ってすばらしいですね。できるならこのままいつまでも一つになっていたいものです。

彼女を得てからすばらしい日々を送ることができた。

もうすでに自分のモノになって久しいが、まだ王妃としてお披露目ができていない。

せつかなので大々的に公表したいので、国中をあげてお祝いムードにすることにした。

そのせいでずいぶん時間がかかってしまったが、ようやく戴冠式を前日に迎えることができた。

コーディオンが上機嫌で王座に座っていると、驚愕な事態が起る。

いつも感じる事ができていたあの彼女の気が一瞬にて消滅したのだ。

コーディオンは慌てて王座から立ち上がって、王妃の部屋へと転移した。

3 (後書き)

本編より長くなる予感が^^^;

4（前書き）

続いてコーディオン視点です。

やっぱり王視点のほうが多くなりそうです。

3の最後すこし変えています（たいした変化ではないけど）。

おとといに見られた人は、ちらっと見なおしてくださいさればうれしいです。

コーディオンが王妃の部屋に入って気がついたのは、自分が独自で張った結界に大きな穴が空いているのと、大きな魔術を使用した痕跡、部屋中に充満した彼女の魔力の残滓だった。

この部屋には腕によりをかけて、特定の人物以外侵入防止、彼女の退出感知、ある種の魔術無効、魔力調整、防音、空調など様々な術を混合させた結界を張っていた。

その結界が破るまではいらないが、人がかろうじて通れるぐらいの穴があいている。

そして、部屋の床に散らばる魔術を使用した痕跡。

転移系なのはすぐにわかったが、ただの転移でないことを彼は見抜いていた。

それは彼が歴代の王族の中でもとびぬけて膨大な魔力を有していたのと、王族や大貴族だけが見れる禁書の存在を知っており彼自身それを読破していたからだ。

「異世界に転移しましたか」

彼女が自分の腕からするりと抜け出してしまったことに、激しい喪失感と絶望感で一杯になる。

気が付いたら部屋に渦巻き状の小さな竜巻が4つほど発生し、部屋にあった小物や置物はおろか机、ベッドまでその渦中で回っている。

それは無意識に放出したコーディオンの魔力が起こしたものだっ

た。

彼女が自分のそばにいない？ありえない。

もう彼女を知らなかった頃には戻れない。あの極上の気を味わってしまったからには。

『わたしから彼女を取り上げるといふならその悲しみで、ついうっかりあなた方の領地に魔術を落としてしまいかもしれませんね。正直、自分で魔力をコントロールできる自信ありませんから』

コーディオンが彼女を王妃にすることを頭のかたい貴族たちに脅したこの言葉は、何も誇大な発言ではなかった。それどころか近いうちに飢餓状態になり自己崩壊し、それこそ究極の魔術を大放出して国半分ほど消滅させてしまう危険すら否定できなかった。

魔力には精神面でのコントロールが大切である。コーディオンにしてもエドワールにしても持っている力が膨大であるだけに、幼い時から自我を抑制したり精神面を鍛えたりしていた。そうしないと周りに魔力を放出させてモノを壊したりしかねないからだ。

歴史の中でも魔術をコントロールできなくて村一つ消滅させた王や、王宮をぶちこわした王族など数多く記録されている。

「これほどソウカに魂を奪われているとは、自分でも思っていましたよ」

コーディオンは自嘲的な笑いをこぼす。

両手を翳しながら、意識して荒ぶる自分の感情を鎮めることにした。

ドスン！

バリン！

そこら中で様々な音が響き渡る。

空で回っていた机やベッドが下に落ちた音、さらに花瓶やガラス

の落下に耐えれず木端微塵に割れる音などだ。

コーディオンはその音に気にかけることもなく、そつと腰を落として床に残る魔術の痕跡に手を触れる。

その時にかすかに第三者の魔力・・・それもよく見知った魔力を感じて一瞬にて身体中の血が沸き起こる。

今度は音もたたずに、その部屋にあった物すべてが木端微塵に粉末化した。

「甘みを感じさせなくするだけでは物足りなかったようですね、エド」

コーディオンは結界に空いた穴にこの時初めて視線を向けた。

そこには蒼白な表情をした幼馴染みや家臣や侍女たちが何人もこちらを窺っている。しかし、コーディオンが視線を送るのはいま感じ取った魔力の主であるエドワールだけだ。

「さて。どういう事なのか、きちんと教えて頂きましょうか？事の次第によつてはこの世に生まれていたことを延々と後悔させてあげますよ。ええ。一瞬で楽になどさせてあげませんからご安心くださいね、ヒロペンサー公爵」

高ぶる気持ちを落ち着かせるためにあえてゆっくりとした口調で問いかける。言い逃れは許さないために普段はエドと愛称で呼ぶところを公爵名で呼んだ。

それに対して、エドワールは額に汗を流しながら唾を飲み込む。眼の前の幼馴染みである主君が今までの付き合いで、本気であることを悟ったからだ。

このままだと、本当に死にたいと叫びたくなるほど拷問される。やばい。

思っていた以上の身の危険を感じる事態ではあるが、王に問い詰められることは予測していたために、きちんと言い訳と対策を練っていたエドワールは慎重に言葉を選びながら説明をした。

「お・・・王妃からの愛の試練でございます。あの方は魔術師として名を馳せられたお方です。昔から自分が嫁ぐのは自分より魔術の優れた者か、他の分野であつても自分を凌駕できるほどの者と、部下につねづね言っておられたとお聞きます。それに王妃となる以上、王族の秘伝の術で今は失われてしまった『異世界への渡り』を取得しなければとお考えのようで、寝る暇を惜しんで研究を続けておられました。それを習得した今、今度は陛下にそれを習得できるよう望んでおられるのだと思われます」

この言葉を当の本人であるソウ力が聞くと、発狂したかと思えるほどの奇声をあげてエドワールに半死上等の高度魔術をしかけていたであろう。

確かに彼女は『私より魔術が使えない者など、男として認めないわよ』と言い寄る部下たちを一掃していた。だが、この世で唯一その条件に当てはまる相手が、この性格破綻者であると知った今ではそれを撤回している。それに、本気で逃げる為の異世界トリップであつて王妃になるためでも、王に追つてほしいからでもない！と声高々に主張したいところだろう。

だが不幸な事が幸いな事が、その場にいないためにそんなソウ力の本音を耳にする者は今ここではないなかった。

「なるほど、そうでしたか。さすがですね。やはり貴女以外に私の妃はありませんよ、ソウ力。その愛の試練、受けて立ちましよう！」

王の背中から鬨志の炎がメラメラと見えている家臣たちは、内心で無理やり王妃にさせられる彼女に憐憫の気持ちを持った。

どうか、諦めてください。ソウカ様。

貴女が王を鎮めてくださらないと、われわれが今の貴女の部屋のように粉末状にされてしまいそうです。

わが身がそれほどかわいいのか！生贄にするな！と言う貴女の慨嘆^{たん}が聞こえてきそうです。その叱咤は甘んじてお受けいたします。

これはその場にいた家臣の1人の心の中の独り言である。

王はエドワール以外の家臣、侍女たちに王妃の体調不良により戴冠式の延期の通達を手配するように指示を与える。そして、残されたエドワールを粉まみれになった王妃の部屋に手招きする。

おそろおそろ足を踏み入れたエドワールに、すばやく手をのばしおなじみの術をかける。『味覚変換』である。

「お・・・おまえっ！」

「エドがソウカに手を貸したことは別です。異世界に跳んでしまうと無数の星から探し出さなければいけなくなります。それを承知だったのに手を貸したのでしょう。覚悟しなさい」

コーデイオンはうつすらと笑いながら手をエドワールに翳^{かざ}す。今回のことは『味覚変換』だけで済ますつもりはない。探し出すのはコーデイオンにとって必須のことであるが、それでもすぐにできることではないからだ。

禁書を読破した彼は異世界の状況を理解していた。

まるで、空に浮かぶ星のように存在する異世界。その中から彼女

がいる場所を見つけ出すのはあまりにも無謀である。

諦めるつもりはないがかなりの時間を有することは確かだろう。それだけ彼女がこの腕にいない時間を過ごさなければいけないのだ。その手伝いをした幼馴染みを到底許せるものではない。

「さあ、どうしてあげましょうか？甘い物だけでなくすべて激辛にしてみましようか？それとも、氷漬けになりますか？なんなら男に反応してしまう身体にしちゃいましょうか？どんな罰がお好みですか？」

「まっ・・・まで！あ、慌てるな！きちんと目印を付けておいた。だから激辛も氷漬けも男色も勘弁してくれ！」

そう言つてエドワールが術をかける。それを見て、コーディオンは安堵のため息をひとつ吐いた。

「なるほど。彼女に目印をつけましたか。これなら確かにすぐに迎えにいけそうです。『異世界転移』も彼女のこの術の痕跡を見れば容易に取得できるでしょう。ですが、それだけでは彼女に認めさせるには足りませんね。この際だから時間をいじれるように工夫しましょう。そうすれば彼女も私を男として認めて愛してくれるでしょう」

こうして、王としての仕事をエドワールにおしつけて2週間自室で魔術研究に励み、連日徹夜の末に時間軸をいじることができる『異世界転移』を取得した。

「では、いつてまいります。なに、すぐに戻ってまいりますので、安心ください」

「おい、こらまで。さっさとこの『味覚変換』解いてくれ。お前じやあないけど、魔力が暴走しそうだ」

最愛の妻を迎えに行こうとしたコーディオンを、眼の下にクマを作ったエドワールが目を真っ赤にさせて止める。連日の王代理の激務に加えて、甘いもの禁断症で体調がおかしくなっているのだ。

「いやです。人の妻にマーキングしといてそれだけで許されるのです。エドでなければ抹殺してたところですよ」

魔術で目印をつけたことは、コーディオンの独占欲を刺激してしまった。たとえ必要な事であつてもだ。

「ああ。あと、エドの部屋にあつたソウカお手製の魔器は没収しましたので」

「なっ！ひど！」

「当然でしょう。私ですらソウカから贈り物を頂いたこともないのに。それも彼女の魔力がこもったものを他の男に渡せるはずありませんよ」

人でなし！鬼畜！

そう言う声が聞こえてきたよう感じるが、もうすでにコーディオンは『異世界転移』の術をかけており、彼の頭の中も彼女がいるであろう異世界のことしか存在してなかった。

4（後書き）

誤字報告お待ちしています。

見直しているつもりですが、けっこうあるみたいで^^;
あ、もちろん、感想もお待ちしています。

薄黒い雲が見渡す限り空中を覆っている。恐らく一刻もしないうちに大雨が降ってくるとだれもが推測できる空模様だ。だが、コーデイオンは天気とは反対に晴れ晴れとした気分でした。

ああ、ようやく、ようやく、彼女に会うことができます。ソウカ、私はやりましたよ。貴女の愛の試練を乗り越えることが叶いました。

荒野に降り立ったコーデイオンは意気揚揚と辺りを見渡す。目で見える限りは何も残っていない。だが、彼女が転移したであろうかすかな魔力の残滓を感じ幸せをかみしめていた。

さて、ソウカを探しましょうか。

彼女の魔力を探知しようとして、ふと異変に気がついた。

おや？あまり魔術を使用していないようですね。

魔力の残滓がこの一帯以外にほとんど存在しないことに気が付き、コーデイオンはかすかに眉をひそめた。

ここでも、試練ですか、ソウカ。

より精密に魔力の探索をかける。

その時、視界の片隅で彼女の魔力の残滓の塊が動くのを感知した。すかさず停止の術をかけてその方に向かう。

そこにはかなり巨大な生き物が口を開けたまま停止していた。

「おやおや。これはトカゲ系の魔物でしょうか？」

なぜ、この生き物から彼女の魔力が感じるのか。分からない。分からないければ、調べればよいとコーディオンは手を翳してトカゲの魔物の頭に術を施した。

その途端に、コーディオンの脳裏に様々な現像が浮かんでくる。トカゲの記憶を読み取っているのだ。

見たこともないほど嬉しそうに笑う彼女の様子に見惚れながら、トカゲの頭を掴む手に力が入ってくる。

「彼女を食べようとしたばかりでなく、汗を吹き飛ばしてもらい拳の果てに彼女に撫でてもらったのですか？許せませんね。私を差し置いてそのようなことを・・・」

トカゲは停止しているはずなのに滝のような汗が体中から流れ出ている。加えてほんのわずかだが小刻みに揺れている。

本能的に命の危機を感知しているのだろう。事実、コーディオンはやる気満々だった。だが、死滅の術をしかける一歩手前で思いなおした。

手を大きく広げ円を描く。するとトカゲの魔物がみるみるうちに縮んでいき、小指サイズまでになった。

さらに指をはじくとトカゲもどきのまわりに丸い球が出現する。青い透明の珠の中に小さなトカゲが入っている形になる。

「さきほどの記憶の彼女は本当に生き生きとして可愛らしかったですからね。その記憶を消すなどもつたいないことです。こうしておけばいつでもみることができます。ソウカコレクションの一つにしましょう」

うつすらと笑いながらたった今作成した珠を懐にしまいこんだ。

そしてトカゲもどきはソウカに発見されるまでコーディオンの懷で仮死状態のままに放置されることになる。

「とりあえず彼女の居場所を掴みましょう」

コーディオンはその場で眼をつぶって小さく息を吐く。途端に、彼女の美しい声が耳に入ってきた。その声に衝撃を受ける。

歌を歌っている……。

「なんて美しい歌声でしょう。この歌をきいたら王宮抱えの吟遊詩人たちの歌などわらべ歌程度にしか思えなくなります。愛し合っているときの声とおなじぐらい艶がありますね」

コーディオンは恍惚とした表情でその歌声を聞いていた。すると、そちらに意識を向けたことで彼女の様子が鮮明に映像として脳裏に入ってくる。

それをみた瞬間、彼の身体中から風が巻き起こった。荒地で生き物が存在しない空間だったためにコーディオンは自分の感情をコントロールする気も起こらず、思いのまま魔力を放出する。

「ああ。ソウカ。なぜにたくさんの人前でその美しい歌声を披露しているのですか？眼の前に陣取っている男どもが貴女を狙っていますよ。今すぐ止めてください！」

コーディオンはこの世の終わりかと思えるほど、美しい顔に皺をつくって苦渋の表現をしている。

その声が聞こえたからというわけではないが、ちょうど歌を披露するのはそこで終了となったようだ。アンコールの声もちらほら聞こえてきていたが、その女主人だと思われる恰幅のいい女性が一声あげてその場は解散となる。さらにその女性がソウ力を呼びなやら布を手渡していた。

どうやら服のようだ。

ソウ力は頭を一つさげてそれをもって奥の部屋に入り服を広げる。それを試着した彼女を見た途端、自分でもわかるぐらいごくりのどが動くのを感じた。

丈は長いドレスである。だが、肩ひもがホルタータイプになって、首の後ろで結ぶタイプなので胸が強調されている。さらに、身体にフィットしているの、今までの服装とちがって一目で彼女の素晴らしい身体付きを見せる形になっている。すそまであるのでそれほど抵抗がないようだ、左後ろにスリットがはいっているの、なまじ肌を露出させるより色気を感じる作りになっている。

決して今まで着せたこともないような露出の高い服。

な、なんですか、そのとんでもない破壊力の姿は。

そんな姿を他の誰かに見せる訳がないでしょう。もし見た男がいれば間違えなく記憶を奪い取るか、視力を失わせるぐらいのことをしなければ気が済みませんね。

コーディオンは物騒なことを頭に描く。

もう我慢できませんね。さっさと行きましょう。

思いのままに彼女の許に転移するために、手を軽く払った。

一瞬で周りの風景ががらりと変わる。

彼女と待望の再会に、たがが外れ思いのまま彼女を求めてしまった。

だが・・・。

コーディオンはひとつ決心を固めていたことがある。

それはこの異世界にいる間に彼女との新たな絆を作ってしまうことだ。

彼女が『異世界への渡り』を習得しているのであれば、今回はエドワールが印をつけていたのですぐに探し出すことができたが、次の同じようにされると探し出すまでにかなりの時間を要する羽目になる。

彼女が真の魔術師体質であることは十分理解している。もちろん、その研究を邪魔するつもりはない。だが、今のままだとその術を何度も駆使して王妃の座から逃れようとするのは眼に見えていた。

さすがに、自分の子を身ごもれば逃げようとまでは思わないだろう。

「すみませんね。それほど貴女の気持ちに私に向かっていなくても、もう手放す気はさらさらなのですよ。ですから、諦めて私のモノになってくださいね」

コーディオンは抱きすぎて気絶するように眠りにについている彼女のふつくらとした唇に、自分のそれをそっと当てながら心の中で謝る。

「こうして二人っきりで仕事をわすれてハネムーンを味わえるなんて嬉しいですよ。本当に1年ほどここで過ごしましようか？」

コーディオンはソウカが聞くと全身全霊で拒否するようなことを、夢すらみないほど深い眠りについた彼女に満面の笑みを浮かべて問いかけていた。

数日で元の世界に帰りたいと懇願するソウカをなだめながら、色々な場所に跳んではふたりつきりを楽しむ。ソウカが1人では異世界に行かないと誓ったことで、ようやく長いハネムーンを終わらすことになった。

戻ったコーディオンはさっそくに侍医にソウカを診せ、侍医から自分の思惑通りの回答を得ることができた。

それを聞き、魂が抜けたようなソウカを抱きしめる。

「これで逃げられませんか、ソウカ。愛しています」

「ちょ!?!?・・・まで!?!?ええ・・・」

自分でも何を言ってるか分かっていない表情の彼女を、より一層強く抱きしめて抱擁する。

「戴冠式は安定期に入ってからにしましょ。では、また夜に会いに来ます」

ちゅつと触れるだけの口付けを奪って、部屋から退出する。

ええええええええええええ。ちょ~~~~。

彼女の可愛らしい叫び声をBGMに、コーデイオンは死神のよう
になっている幼馴染みのいる執務室へと軽やかに足を運んで行った。

5（後書き）

コーデイオン視点、ここで終わりです。

とりあえずこれで完結です。

気が向いたら短編で後日談を書くかも？

自分の趣味爆裂の話をここまで読んでくださって、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9481t/>

2 番目の魔術師の受難

2011年6月14日18時25分発行